

戦争

戦争が始まったとき、僕は5歳になったばかりだった。「零戦」や百式重爆撃機「呑龍」、一式戦闘機「隼」などのおもちゃを買って、もうこの

私の履歴書

久 克 部 服

⑤

機武蔵製作所があり、米軍の標的にされた。ちょうど我が家の真上あたりでB29爆撃機のおなかがパカッと開くのを見ても目にした。そこで爆弾を落とせば製作所あたりに落下するという計算だろうと少年なりに分析していた。

爆撃機を迎え撃つため、家の近くに高射砲陣地があった。1944年ごろになると

ちてくる。我が家の屋根瓦はしょっちゅう砕け、雨漏りは日常茶飯事だった。防空ずきんはB29対策というより、味方の高射砲の破片をよけるためにあった。

その破片はナイフのように鋭くなっていて、鉛筆ぐらいはスパスパと削れた。僕は破片を箱に集めておいて、友達との鉛筆や消しゴムなどと取り

毎晩、近所でB29迎撃

高射砲の破片集め友と交換

毎晩のようにドンドンやってきた。あれだけ撃つたのに命中したのは2機ぐらいではなかったか。一度だけ墜落した

B29を見に行ったことがある。後年、タークタクスの「ゲタさん」こと喜早哲さんに話したら「それ、覚えてるよ。おれも行った」と言う。偶然、近所に住んでいたのだ。

近くで高射砲を下ドンドン撃つから、破片がバラバラと落ちてくる。我が家の屋根瓦はしょっちゅう砕け、雨漏りは日常茶飯事だった。防空ずきんはB29対策というより、味方の高射砲の破片をよけるためにあった。

その破片はナイフのように鋭くなっていて、鉛筆ぐらいはスパスパと削れた。僕は破片を箱に集めておいて、友達との鉛筆や消しゴムなどと取り

続的に何度も鳴る。空襲警報だ。家族みんなで庭の防空壕に飛び込む。ラジオから「敵機、房総半島より侵入」の声を聞かれ、上海から頻繁に手紙を送る。ある日の便りには「元氣ですか。ちゃんと食べ

いたことは確かだ。父は44年6月に中国に渡っていった。上海陸軍報道部に配属され、上海から頻繁に手紙を送る。ある日の便りには「元氣ですか。ちゃんと食べ



父と兄弟たち (手前が筆者)

「チョコレートを送ったから、そのうち届くと思います」のくだりで歓声が上がったのだが、船便で届いたチョコは無残にもカビだらけだった。

45年3月10日。吉祥寺の家から遠く東に見える空が赤く染まっていた。祖父の住む浅草辺りが交錯する中をカラスのよう

(作曲・編曲家)